

【論文】

鐘・雲版・鰐口

—駿遠から南信へ—

足立 順司

要旨 南信濃にある梵鐘・雲版・鰐口の一部には、奉納先の三河・遠江・駿河を離れ、伝世する例がある。むろんある時期、奉納先から人によって運ばれてきたものであるが、なぜ、どのようにして、どんなルートで運ばれたのかを検討する。

またこれら仏具の型式的特徴から一部が遠江・駿河の鋳物師集団の作品であることを指摘し、今も遠江・駿河に残る仏具との近似点を取りあげて、その関係についてもふれている。このように小論は梵鐘・雲版・鰐口を単に銘文だけを取り上げるのではなく、三・遠・南信における移動の意味やそれに基づく新たな地域史を描こうとしている。

キーワード：梵鐘、雲版、鰐口、南信地方への移動、秋葉街道、国境の鰐口

はじめに

梵鐘・雲版・鰐口（あわせて梵音具という仏具）は、永久に保存されるであろうと銅など金属で造られている。そこに陽刻・陰刻された銘文についても永久に保存されるであろうと刻まれていた。なお鰐口・雲版は梵鐘に比べ小さいため、銘文を刻むスペースは小さく、奉納先、奉納の目的、旦那、願主、奉納の年月の限られた内容が刻まれている事が多い。そこにはこの仏具はいつごろ、誰々が本願や願主となって費用を出して奉納したか、場合によっては鋳物師は誰々であるという銘も加わっている。

奉納先が別の社寺に変わると、銘文は空いた空間や裏面に追刻されている。この短い銘文には最低限これだけは刻んでおこうとする思いがあるが、記載された情報量は限定的であり、同じ文字資料でも文書・記録、古典籍に比べ断片的である。そのためこれまで梵音具の銘文は、中世史の補助資料として集成されるものの、坪井良平氏の梵鐘研究（坪井良平1970）を除けば、本体そのものや地域史の中で重ね合わせて考察する姿勢にやや欠けていた、といつても過言ではない。

今回、小論は過去に知られていたもののほかに、新たに判明したものも含め、南信濃にある梵鐘・雲版・鰐口のうち、もとは遠江・駿河（一部、三河も含む）に奉納されていたものを中心にすえ、どのようなもの

がなぜ、そしてどのようなルートで移動しているかを考えてみたのが、以下の小論である。

むろん銘文の分析ばかりではなく、本体そのものや地域史の中で重ね合わせて考察したつもりである。それは調査先で投げかけられた、「この鰐口は遠州のどこから、なんできたのでしょうか？」という私も知りたい疑問に少しでも答える意味でもある。以下、梵鐘・雲版・鰐口と順を追って述べてみたい。

1 梵鐘

最初に飯田市にあるつぎの梵鐘2口を取り上げることしたい。1は飯田市千代の臨済宗妙心寺派法全寺にある梵鐘で、つぎの銘が刻まれている（静岡県1996）。

第1区 聞鐘声煩惱輕

知惠長菩提生

離地獄出火坑

願成仏度衆生

遠江国豊田郡

第2区 内高蘭鄉萩原

新善光寺奉

謹鑄之旦那

賢守 明永 善光

大工大和国藤原俊次

勸進聖栄尊之

永享十一年己羊十二月十一日

坪井良平氏の計測値（坪井良平1970）では84.7cm（鐘身64.6cm）、口径49.1cmで、乳は4段4列、上帶、下帶は素文である。

第1区の「聞鐘声煩惱輕……願成仏度衆生」は、鐘の音を聞くと仏の智を得、煩惱を断つ、菩提を増し苦を消すという梵鐘を讃えるもので、出典は明らかではないが鐘銘に何例かある偈頌という（坪井良平1970）。

奉納先である高瀬郷萩原新善光寺については、小杉達氏（小杉達他1989）や『浜北市史』（浜北市1989）によつて、浜北市永島に存在した寺院であることが指摘された。延宝6（1678）年前後に作成された「青山御領分絵図」（浜松市役所1971）には善光寺と如来堂が描かれている。やがて廃寺となつたらしく、その後の地誌類には認められない。全国各地に善光寺の阿弥陀尊を写し、本尊とする新善光寺があるが、その一例である。永島の新善光寺については、宗派も含めほとんどが不明であるが、各地の善光寺が都市や交通の要衝地にあるので、この地が天竜川の渡河地点であったかも知れない。

ほかに県内には藤枝市鬼岩寺の中に新善光寺があつて、そこに寄進された長享2（1488）年銘の雲版が長野県上田市にある。当時、鬼岩寺は真言律宗であったが、一山組織の場合、山内に別の宗派の阿弥陀信仰があつても不思議ではない。

高瀬郷萩原新善光寺雲版に寄進した賢守 明永以外の善光とは、本田善光にちなむ名誉ある法名であろう。銘文の大和の鋳物師藤原俊次は大和の下田大工ではないかと推定されるが、遠江まで出職したのであろうか。

2は飯田市立石の真言宗立石寺にある梵鐘で、つぎの銘が刻まれている（坪井良平1958）。

第1区 三河国設楽郡

岩倉大明神之鐘

嘉吉三年臘月十三日鑄之

第2区 政所 智巖

正因

幹縁 資広

祢宜 満海

重光

鳩氏 兼久

諸施主等

第3区 信州伊那郡立石村

千頭山

立石密寺現在

法印天海求之

文亀元載

仲春吉良鳥

第4区 日本国遠江州伊那郡今多佐村安楽寺

之鐘也 使白水真人得之

文明元季己丑仲冬吉日

化縁比丘昌真誌之

坪井良平氏の計測値（坪井良平1970）では87.1cm（鐘身66.5cm）、口径51.5cmで、乳は4段4列、上帶、下帶は素文である。

1次銘から、当初、愛知県新城市の岩倉大明神（現在は石座神社）之鐘として嘉吉三（1443）年十二月十三日、鑄物師の兼久によって鑄造されたことがわかる。坪井氏は鑄物師兼久は豊川市牛久保の鑄物師ではないかとしている。

第4区の2次銘から、文明元（1469）年十一月吉日に白水真人を使者としてたて、岩倉大明神の鐘を伊那郡今多佐村安楽寺の鐘に譲り受けたことが判明する。この「今」多佐村の今は、文意からすれば「今（どう）か「分（うち）」の異体字ではないだろうか。多佐村とは現在の浜松市北区滝沢（たきざわ）の古名「たづさ」（たづさーが原音に近い）村である。安楽寺は安楽寺大日堂のこと、明治初期の神仏分離の際、大日堂の建物は四所神社拝殿に転じ、本尊の大日如来は曹洞宗林慶寺に移されている。

3次銘から文亀元（1501）年二月に天海法印が梵鐘を求める、現在の立石寺に落ち着いたことが判明する。岩倉大明神へは26年、安楽寺へは32年、立石寺へは今日までと1次と2次の所有期間はそれほど長いことはない。

梵鐘の入手方法も「使白水真人得之」（安楽寺銘）、「法印天海求之」（立石寺銘）とあり、戦乱による移動とは考えられない。この文意からむしろ意を尽くして交渉し購入という手続きを踏んだと考えておきたい。

2 雲版

伊那市の曹洞宗常圓寺には遠江にあった雲版が所蔵されている（佐藤郁太2004）。雲版は全長44.8cm、幅38.3cm、厚さ0.4cm、縁厚0.8cmを測る。吊手孔は1ヵ所、撞座は単弁胡桃座連華紋で直径5.4cmを測る。撞座両面に叩いた跡があるが、表面の撞座紋様は明瞭であり、あまり叩かれていない。常圓寺側では、この雲版は天正10（1582）年における織田軍の伊那侵攻に伴つて持ち運ばれたと伝わっている。



図1 法全寺梵鐘



図4 常圓寺雲版



図2 立石寺梵鐘



図5 常圓寺雲版銘



図3 旧安楽寺大日堂



図6 市川市總寧寺

表裏両面に以下の銘文を刻んでいた。右左は撞座を中心とした位置である。以下のように肝心の奉納先に釈読できない箇所があつて、さほど論じられることはなかつた。従来の代表例として『静岡県史資料編7』(以下、資料編7に略)を掲げる。

表右 遠州□河村山之口……(右の右側)

□□山龍安禪寺……(右中央)

以下の銘文はほぼ一致しているので、略す

資料編3では上記の□□山龍安禪寺を万年山カとしている(静岡県1994)。

実見し精査した結果、銘文の不明であった文字を釈読でき、文意が理解できた。この私見と釈読に基づきこの雲版の歴史的意義について1、2考え方を述べてみたい。

表右 遠州懸河村山之口……(右の右側)

萬年山□(※)安禪寺……(右中央)

雲版一枚寄進之……(右の左側)

表左 金屋住人……(左の右側)

横山久次……(左の左側)

裏右 開山越翁……(右の右側)

原超和尚……(右の左側)

于時天文元年……(左の右側)

壬辰霜月念日……(左の中央)

入院……(左の左側) (※異体字)

資料編7では右の左側の「原超和尚」を「周超」ではないかとしている。さらに越翁周超に係わつて『日本洞上聯燈錄 九』の項を掲げている。しかし現物は原超としか読めない。

雲版は火熱を受け、ややゆがんだ箇所もある。遠州「懸」の文字は異体字で懸の心が4点で表され、部首名称のれっかである。「懸河」は寛永以前には掛川ではなく、懸河と表したとされ(『掛川誌稿』)、山之口は掛川市下俣の字名であり、現在は「山ノ口」と表記する。「萬年山□安禪寺」については一時、廃寺となつて江戸時代に再興された曹洞宗通幻派の萬年山乗安寺が存在する。このことから銘文は、現在の掛川市下俣(県立掛川東高付近)に所在する乗安寺の前身に金屋の住人横山久次が天文元(1532)年十一月二十日 原(周超の先行名カ)超和尚入院記念に雲版一枚を寄進する、という意味であろう。

この時期、周超の乗安寺は曹洞宗にとって大きな意味があつた。以下、この点を述べたいと思う。

周超の属した通幻寂盡の法統を伝える通幻派は、各地に寺院を造り弟子を育成し大衆に布教することで、

曹洞宗教団の教線拡大にとって、大きな力を發揮した。萩原龍夫氏は「著名禪宗寺院と謎とその解明」(萩原1974)の中で、なお解明できなかつた点を課題とした。今回、この1枚の雲版の中にその解答が含まれていたのである。その点をふれてみたい。

千葉県市川市には江戸時代曹洞宗総録司となつた総寧寺があり、同じ寺名の総寧寺が近江にもある。萩原氏によれば、安國山総寧寺の山号と寺号は曹洞宗本山総持寺直末で、通幻寂盡を開山とすることである。近江総寧寺は、享禄三(1530)年の越翁周超の代に兵火にかかり廃寺となつて、下総関宿乗安寺に避けたという寺伝がある。そのため近江総寧寺の法統を伝えるため、各地を転々としながら、開山通幻寂盡の名と山号と寺号を市川市総寧寺まで伝えたことになるという。ただし近江の総寧寺も江戸時代に入ってからの寺号で、旧は乗安寺と考えられる。関宿の総寧寺は天正三(1575)年には存在しているが、乗安寺を名乗っている。萩原氏の指摘通り、なお近江から関宿までの動向が課題となつた。

今回の雲版は天文元(1532)年周超が懸川乗安寺に住職として始めて寺院に入ったことを刻んでいる。このことは近江を離れ流転したのち、掛川で寺院建立がなり、やっとの思いで、法統が伝わつたことを意味する。ではなぜ掛川であったのか。

『掛川誌稿』によれば、掛川乗安寺は掛川城主朝比奈氏が開基となっている。掛川朝比奈氏は今川氏の宿老であり、そのころの当主朝比奈泰能は、その室に大納言藤原宜秀の娘を迎えていたほどの有力者であった。泰能は弘治3(1557)年8月晦日に亡くなつてゐるが、その際の百ヶ日法要の記録が『掛川誌稿』に抄録ではあるが残つてゐる。法名は乗安寺殿松月秀長大禪定門と開基者にふさわしい法名である。荼毘、葬送儀礼が、今川家当主氏親に並ぶものであったという。この時の住職が州翁壽欣であった。周超から学仲覚周を挟んで3世である。

このように朝比奈氏の手厚い庇護を請け建立した乗安寺も、永禄11から12(1569)年における徳川家康の掛川城攻めで一変する。千葉県側の伝承では永禄年中、兵火に会い、北条氏政の支配する関宿に移動したと伝えているが、まさに掛川城攻めのことと考えられる。掛川乗安寺の最後の住職は四世である義翁盛訓であった。その後の展開をみるとこの人物は、掛川城開城とともに、今川氏真や朝比奈泰朝に同行した可能性が高い。法統をつなげたことによって乗安寺から総寧

寺と替わり、曹洞宗関東総録司となつていった。掛川乗安寺近隣には曹洞宗東海総録司となつた可睡斎（大源派）がある。曹洞宗の教線拡大にとって転機となる、大きな意味を持つ地域といえよう。同時に焼け残ったこの雲版を携え伊那の地に足を留めた、乗安寺に関係する無名の僧侶の存在を感じるのは私の思い入れであろうか。それは織田信長が遠江に侵攻した事実ではなく、雲版に係わることはありえないから、織田軍の伊那侵攻以前であろう。

3 諏訪・伊那谷の鰐口

観音院の鰐口

諏訪湖の南西に位置する岡谷市小坂観音院観音堂には以前に論じた鰐口がある。この鰐口は面径27.5cm、厚さ13.7cm、肩の厚さ8.4cmを測る。耳は両耳式で、耳幅は4.7～4.6cmを測る。撞座は単弁13枚（表）、12枚（裏）と変形蓮弁紋で、遠江にはない撞座紋様である。銘帯と内区の間が幅広い隆起帯があるが、銘文が彫られているため、外区となっている。

銘文から今の磐田市（旧竜洋町高木）九所大明神に奉納するために鑄造されたこと、種子からこの本地仏は薬師如来であったこと、それより70年後、浜松市中区鴨江寺の本尊観音菩薩に再び奉納されたこと、さらに8年後には遠く諏訪の地へ奉納されたことが鰐口の表と裏に刻まれた銘文から理解できる。以下の銘文のうち信州の「州」の字は刀を3組重ねる異体字であって、遠州や遠江州の「州」の字と異なるほか、異筆である。

バイ（薬師如来の真言）遠州豊田郡河勾庄高木郷九所大明神金鼓也旦那平幸久……（表右銘帯）

右拵以吉日良辰鑄之者也明応五祀丙辰六月廿八日
……（表左銘帯）

天正仁年甲戌霜月十八日……（表右外区）

信州小野大祝源満昌敬白……（表右内区）

サ（観音の真言）遠州鴨江寺本堂仁奉寄進松下藏人建昌……（裏右銘帯）

永禄九年丙寅五月十七日願主大丹坊宥誉……（裏左銘帯）

なぜこの鰐口が、短期間のうちに鴨江寺から遠く信濃の小坂観音院から移動したかについては、以前指摘したように元亀3（1572）年の三方原の戦いに結びつけて考えたい。それは三方原の戦いに大勝した武田軍が浜松城下まで攻め入り、鴨江寺に懸かっていたこの鰐口を乱取り・略奪し、小野神社大祝が持ち帰り観音

院に寄進したと考えたからである（足立順司2010）。この人物は武田軍のうち武田勝頼隊に属していたと考えられる。

さらにこの鰐口の表面には手荒く扱ったのか無数の傷が付けられている。この傷は、おそらく馬に綱を付けた鰐口を引っ張った際に、地面と鰐口がこすれできたものと考えられる。

七蔵寺の鰐口

辰野町上辰野にある真言宗七蔵寺には三河法言寺銘の鰐口がある。この鰐口は面径21.4cm、厚さ9.85cm、肩厚5.96cm、耳幅2.95～2.8cmを測る片耳式である。撞座は細い剣先蓮弁紋である。表の銘文はつぎの通りである。

奉懸三州八名郡赤岩山法言寺本堂御宝鰐口

……（表右銘帯）

時永正七季七月吉日願主平内馬七郎助七郎

左衛門三郎左近太郎妙椿敬白

……（表左銘帯）

願主の人々は並列二段書きである。

銘にある奉納先「赤岩山法言寺」とは今の豊橋市多米町にある真言宗寺院赤岩寺である。この寺は一山十二坊の大寺であったが、永禄12（1568）年には七坊で一山をなしていた、という。それにしても戦国期の地方寺院としては大寺院であることは間違いない。慶長9（1604）年に行われた屋根吹き替えの棟札には阿弥陀三尊の種子が書かれ（豊橋市美術博物館2002）、この本堂の本尊は阿弥陀如来と考えられていたと思われ、鰐口はこの本堂に奉納されたといえよう。

鰐口の願主は苗字のない平内、馬七郎、助七郎、左衛門、三郎（または三郎左近）、左近太郎（または太郎）であり、妙椿は尼成りとなった婦人であろう。この人々は農民か商工業者かは不明であるが、平等に布施を出し法言寺へ鰐口を寄進したのであろう。

ではなぜこの法言寺から七蔵寺へ鰐口は移動したのであろうか。天文元（1532）年、法言寺は今川義元から寺領6貫文の寄進があったことを伝え、平安時代や鎌倉時代の仏像もそのまま伝来している（豊橋市美術博物館2002）。このことから今川氏という三河の新たな支配者にも厚い信仰を受け、江戸時代には吉田藩の代々祈願所となるなど、法燈を伝え継続している。このことから法言寺の衰退によって本堂の鰐口を手放し、やがて七蔵寺に移動したと考えることはできない。すると寺側の理由ではなく、外的強制力が働くできごとがあったと考えられる。

以前指摘した遠州浜名郡本坂十王堂銘の鰐口が、かつて山梨県南アルプス市本重寺に所蔵されていた。三方原の大勝以後の武田軍は本坂越えを進軍したという。まさしく本坂峠は武田軍の進軍コースにあたり、鰐口はその傍らにあった十王堂の持物であったことから、この鰐口の移動を武田軍の略奪行為の傍証とした（足立順司2010）。

武田軍三万という大軍の移動は本坂越えのみではなく、複数のコースを選んだと考えられる。その一つにそれより南の多米峠越えもあり、進軍の最中、傍らにある法言寺の鰐口を略奪し信州に持ち帰り、七藏寺に奉納したと考えておきたい。また南信濃の鰐口には、かつて三河にあったものは少なく、法言寺の鰐口は中古品の販売ではない、特殊なケースである。2点の理由からもこの鰐口の移動には外的強制力が働いたものと考えたい。

瑠璃寺の鰐口

坪井良平氏によれば、長野県高森町大島山の瑠璃寺には、遠江多佐村安楽寺大日堂に奉納されていた鰐口があり、以下の銘が刻まれていた（坪井良平1958）。

遠州井伊多佐村大日堂打響

康正元年乙亥十一月吉日

奉納先の伊多佐村大日堂とは、立石寺梵鐘の第2次奉納先である多佐村安楽寺大日堂のこと、現在の浜松市北区滝沢町に明治初期まで存在した。廃寺となつた大日堂は現在、神社の建物と利用されている。

なお井伊とは井伊保のこと、滝沢もその範囲であったことを知ることができる。鰐口の奉納された康正元（1455）年十一月吉日は、梵鐘奉納の14年前にあたる。

残念ながら鰐口は、第二次世界大戦時に供出され現存しない。さらに坪井氏が見たというこの鰐口の写真も、今は瑠璃寺に残っていない。

岩崎毘沙門堂の鰐口

愛知県の愛甲昇寛氏による鰐口・雲版集成（愛甲昇寛2007）に伊那市西春近に所在する白山神社旧蔵の鰐口銘が収録され、足立の知るところとなった。この鰐口については静岡県側では知られていないところから、氏に出典（伊那市史刊行会1984）の御教示と該当箇所のコピーをいただいた経緯がある。以下がその銘文である。

奉懸鰐口質呂庄岩崎毘沙門堂常住用之

于時永正十四丁丑歳五月廿一日 檀那徳秀敬白

大工定信 本願諸吉

奉納先の岩崎毘沙門堂は、この銘によって遠江質呂

庄（志戸呂）にあったことが判明した。では質呂庄のどこであろうか。

文化・文政期に編纂された『掛川誌稿』の「志戸呂村」（現 島田市志戸呂）中に「岩崎山観音寺」の項がある。要約すると本尊は薬師如来、境内に觀音堂があつて遠州觀音靈場34番札所となっている。もとは觀音寺坂の西にあった。それは大井川の南岸で岩崎である、と記されている。現地の觀音寺坂を歩くと、地元で岩崎山と呼ぶ場所があるので、銘文の毘沙門堂はかつてここに存在したと推定される。岩崎とは志戸呂村の狭い範囲であり、先の岩崎山観音寺と併存したとは思えないので、觀音寺の創建される前に廃寺となり、他の仏具とともに鰐口を手放した結果、白山神社まで移動したと考えられる。

静岡市安西大林寺（曹洞宗）の鰐口は、従来、つぎのように釈読されていた（静岡県1992）。

奉施入岩守（*）毘沙門 敬白……（表右銘帯）

寛正五年甲申三月十一日願主……（表右銘帯）

□……（裏右銘帯上）

正家……（裏右銘帯下）

山神五所大明神守護給願主敬白……（裏右銘帯）

奉施入鰐（*）口一ヶ牛頭天王……（裏左銘帯）

文明十八年丙午……（裏右撞座区）

十二月十八日……（裏右撞座区）

一搏（*）……（裏撞座区下）

（*）は異体字 以下同じ

別につぎの追刻があり、大林寺へ鰐口を寄進した人物と寄進の年月が判明する。

大正六年觀音入佛記念 大林光禪代……（肩部）

施主 辻村ぎん（表銘帯上）

この鰐口は面径16.5cm、厚さ7.9cm、肩厚4.6cm、耳幅3.4~3.27cmを測る片耳式である。型持は裏に1ヶ所認められる。撞座は八曜の星形文で、中央に五つ珠文がある。この特徴ある星形文は遠江東金屋（現在の島田市金谷周辺）の鋳物師集団の作風であり、この鰐口は東金屋鋳物師の作品と考えられる。

ところで銘文の異体字は鰐（*）口を金偏に魚の旁で表し、敷を「搏」としているので、法名は「一敷」と読める（常用漢字に改める）。

岩守（*）の「守」はウ冠に寸ではなく、実見した際より違和感があった。立を冠とし、下は可の一角目を省略した文字であり、可能性として「寄」や「崎」など別の文字の異体字ではないかと思っていた。「崎」の異体字には山偏を冠とする例があり、本例は山偏を省



図7 観音院鰐口（表）



図11 西春近白山神社



図8 観音院鰐口（裏）



図12 大林寺鰐口（表）



図9 七藏寺鰐口



図13 大林寺鰐口（裏）



図10 高森町瑠璃寺



図14 中立稻荷神社



図15 下栗拾五社鰐口



図16 下栗拾五社神社



図17 伊大郷銘鰐口



図18 赤池銘鰐口

略した例ではないかと考えている。

よって表右銘帯は「奉施入岩崎（*）毘沙門」となり、最後は「願主敬白」が正しく、「奉施入岩崎（*）毘沙門 寛正五年甲申三月十一日願主敬白」と釈読できる。

のことにより、先に指摘した岩崎毘沙門堂銘鰐口（白山神社旧蔵）以前に、この寛正5（1464）年銘の大林寺鰐口は岩崎毘沙門に奉納するために、東金屋鑄物師の手によって鑄造されたことになろう。

つぎには文明18（1486）年、山神五所大明神（山神は別の奉納先の可能性もあり）に、一敷の手で再び奉納されたと考えられる。このことは筆跡の同一性と裏面銘帯右に刻まれているという位置から2番目に刻まれたことが判明する。つづいて年次不明ながら正家によって牛頭天王に3度目の奉納が、さらに大正6（1917）年、辻村ぎんによって大林寺に4度目の寄進があったこととなろう。山神五所大明神と牛頭天王への寄進する旨の刻字は稚拙で、専門の鑄物師の手ではないかも知れない。最も端正な刻字は大正の銘であり、専門家

の手によると思われる。大林寺の鰐口は中世から大正時代まで、古物としての仏具が幾度となく奉納先を変えた例として貴重である。

4 遠山谷の鰐口

戦前、市村咸人氏は遠山地方にたくさんの寛永以前の鰐口が残っていることを指摘し、そこに地域的特性を考え「遠山の鰐口文化」を提唱した（市村咸人1932）。遠山谷になぜ鰐口が多いかはひとまず置き、市村の報告した鰐口やその後、発見された中に、もとは遠江に奉納されていた例があることは、すでに指摘されたところである（長野県立歴史館2000）。

今回、さらに追加すべき例や駿河から移動した鰐口があることが判明した。以下、これらの鰐口について述べてみたい。

中立稻荷社旧蔵の鰐口

飯田市中立（旧南信濃村）の稻荷神社の鰐口は市村氏の報告した例ではあるが現存しない。市村氏によると径は4寸8分（16cm前後）で、「遠州豊田郡池田庄本

郷正福寺 旦那二郎衛門宝徳元年十二月吉日」と刻まれていた。写真を見ると撞座は無文で足立のいう鉦鼓型に属する（足立2009b）。銘文の池田庄本郷とは、旧豊田町（現 磐田市）上本郷か下本郷のことであるが、該当する寺院は現存せず不明である。

下栗拾五社神社の鰐口

飯田市下栗拾五社神社の鰐口は市村氏の報告した例ではあるが、その当時は下栗の大野子安三社大明神の持物であった。下栗は南アルプスから伸びる尾根の標高1100mから900mの斜面に耕地と民家が点在し、「天空に近い村」あるいは「日本のチロル」と称されている集落である。その中でも大野は下栗でも最も奥にあって、本村から5.5kmほどの距離であるが、下栗集落は最初、大野から始まったという。子安三社とは子安大明神と赤崩大明神、池大明神を合祀したもので、それそれが大野の前澤家、胡桃澤家の氏神であったが（飯田市美術博物館2009）、祭祀の家々が大野から転居したため鰐口は本村で管理している。この鰐口銘文はつきの通りである。

大峯上鮎釣西光寺之……(表右銘帶)

長合之大願主左衛門二郎重氏……(表右銘帶)

長祿四年庚辰年……(裏右銘帶)

二月廿五日願主敬白……(裏左銘帶)

面径17.8cm、厚さ8.7cm、肩の厚さ5.48cm、耳は両耳式で耳幅5.6～5.3cmを測る。撞座は両面が叩かれ、とくに裏が強く叩かれている。撞座は無文で足立のいう遠江・三河に多い鉦鼓型に属すが、銘帶と内区を分ける圈線中央線が隆起するタイプで、鉦鼓型では例が少ない。

銘文の大峯上鮎釣については、市村氏以来、旧佐久間町（現浜松市天竜区）鮎釣とされているが、大峯とある以上、それより13km程下流の旧龍山村大嶺（現浜松市天竜区）鮎釣と訂正されるべきである。ここには慶長年間の棟札に記された曹洞宗神応山西光寺が存在した。長祿4（1460）年の寄進先西光寺はこの寺院とみて良い。なお下鮎釣が旧天竜市域にあるので、旧龍山村大嶺鮎釣が上鮎釣となろう。

蛇足ながら東京国立博物館所蔵の文明4（1472）年銘の鰐口には、「奉懸遠州西手大嶺觀音堂之帳合者 文明壬辰十一月吉日願主宮太夫敬白」と奉納先が刻まれている（東京国立博物館1980）。この觀音堂とは旧龍山村大嶺（現浜松市天竜区）中日向にある十一面觀音堂であろう（龍山村1980）。

中郷正八幡宮の鰐口

飯田市中郷字宮の平に所在する中郷正八幡宮は、小祠10座が本殿内に合祀されている。この合祀された神々は中郷の各一族の氏神と推定され、古い祭祀形態を留める。長野県立歴史館の調査で、この神社の鰐口の存在は明らかにされたが、具体的な奉納先については不明とされていた。今回、鰐口の型式的特徴と銘文の分析によって、この鰐口のうち2口がもとは遠江・駿河に奉納された鰐口であったことが判明したので、以下、順を追って述べてみたい。

キリーク 伊大郷 (*) 十二權現鰐口也 (*)

……(表右銘帶)

永享八年十二月日……(左右銘帶)

面径14.3cm、厚さ6.3cm、肩の厚さ4.2cm、耳は片耳式で耳幅3.4～3.3cmを測る。撞座は両面が叩かれている。銘文の伊大郷とは、現在の島田市伊太であろう。ここには『掛川誌稿』「駿河国伊太村」の記述ある「十二艘權現」があり、「薬師堂の後にあり、祠三尺、熊野權現を祀ると云、十二艘或いは十二相又十二社に作る・・」とある（名著出版活字版1972）。この珍しい社名と伊大郷が結びついたことから、中郷正八幡宮鰐口1口は駿河から南信濃に移動したきわめて珍しい例であることが判明した。

鰐口の型式的特徴である撞座文様は6曜の星形文で、東金屋鑄物師の作風である。さらに星形文の中央に斜めに4個の珠文を加えている。この特徴は旧春野町（現浜松市天竜区）水船の鰐口の文様と近似している。中郷正八幡宮の年代が永享8（1436）年であり、水船鰐口は同じ年の11月と先行することからも同一鑄物師か同一系譜の作品といえよう。水船鰐口の銘文にある奉納先「吉永郷」とは富士市吉永郷とする伝承もあったが、鰐口の型式的特徴が東金屋鑄物師の作風であり、製作地に近い中世、初倉庄に含まれていた旧大井川町（現焼津市）吉永とすることが妥当であろう。つぎに2口目の鰐口についてふれる。

赤池 (*) 郷□□觀音御宝前鰐口……(表右銘帶)

天文十三年十二月日甲辰□五月吉日……(左右銘帶)

面径13.6cm、厚さ5.5cm、肩の厚さ2.95cm、耳は両耳式で耳幅3.1～2.9cmを測る。撞座は両面が叩かれている。天文13（1544）年銘であるが、扁平な断面で古い形態を残す。鰐口の型式的特徴である撞座文様は14曜の星形文で、中央の珠文は1つである。この例は永正14（1517）年貫名郷大頭領權現銘の鰐口撞座に近似する。ただし貫名銘鰐口が8曜の星形文である。この貫

名郷とは袋井市貫名のことであり、赤池に近い。もう1例は旧中川根町（現川根本町）久保尾の鰐口の撞座文様に近似しているが、この例も8曜の星形文である。この例は古く嘉吉元（1441）年の年紀が彫られている。これもいすれにせよ星形文で中心に珠文一つという意匠は、遠江の鰐口にしかみられないことから、遠江の鰐口と考えられる。

ところで銘文の赤池郷とは、従来、「赤地郷」と釈読されていたが、さんずいを草書風に表す異体字であり、むしろこの方が多いのである。鰐口が遠江の型式的特徴をもつことから、銘文の赤池郷とは遠江国赤池である。するとこの赤池郷とは旧豊田町（現磐田市）赤池であろうと考えられる。いすれにせよ中郷正八幡宮のこの鰐口は、遠江から移動した鰐口の一つであろう。

5 まとめ

以下の1・2点についてふれ、小論のまとめとしたい。

（1）鐘・雲版・鰐口の来た道

駿河、遠江、三河から南信濃に運ばれた梵音具を表1にまとめた。駿河から1例、遠江から立石寺の梵鐘を含め9例、三河から3例と、圧倒的に遠江からの運ばれた例が多い。

先に述べたように、岡谷観音堂の鰐口と常圓寺の雲版については特殊な事情によって運ばれたことが考えられる。

さらに滝沢（引佐郡井伊多沢）安楽寺大日堂の梵鐘と鰐口が、飯田市立石寺とその近隣の高森町瑠璃寺に収まったことは、偶然とはいはず、両者に縁を持つ人物が仲介したものと思われる。それ以外の鰐口は天竜川流域の中流域の旧龍山村大嶺の寺院と河口付近の旧豊田郡南部（現磐田市）の寺院から運ばれている。

そこで想起されるのは遠江国府見付矢奈比売神社（見付天神に略）と駒ヶ根市光前寺を結ぶシッペイ太郎伝説である。その概略はつきの通りである。

見付天神の祭祀に毎年、怪物に見目麗しきものを人身御供として差し出し、見附の町方は難儀していた。それを聞いた廻国の六部が信濃光前寺の飼い犬、シッペイ太郎を見付天神まで連れ、怪物を退治したという。そしてその礼として見付天神の社僧が大般若経を書きし、光前寺に贈ったという伝説である。

この伝説の背後には様々な要素が含まれているが、一つに中世、南信濃と見付との間に何らかの深い交流があったことを象徴している。このことからすれば見

付近隣である豊田郡南部の鰐口が、複数、南信濃に運ばれていることもいわれなしとはいえない。

ではこれら梵音具はどのルートで運ばれたのであろうか。信州には「塩の道」、「遠州街道」（遠江側では信州街道）とも呼ばれる道があつて、江戸時代に入り、秋葉山信仰の隆盛とともに「秋葉街道」となった国越えの道があつた。下栗拾五社鰐口の旧奉納先大嶺はこの道の対岸にある。江戸時代には大嶺西川には渡船場があつたことから、大嶺は要衝の地であった。これより下流の秋葉街道は森町経由と浜松市天竜区二俣など複数に分かれるが、見付、豊田郡の村々との往来もこの道であった。

旧水窪町（浜松市天竜区）の青崩峠は秋葉街道における国境の峠であり、遠江側から登れば信濃遠山谷に下る。遠山谷に遠江からの鰐口が多いことも首肯できる。豊田郡新善光寺銘梵鐘のある飯田市千代法善寺は、合戸峠を越える秋葉街道に沿った寺院で、旅人がしばしば足を休めた場所として知られている。このことから秋葉街道は遠江と南信濃を往来する幹線道路であつて、鐘・雲版・鰐口の来た道でもあった。

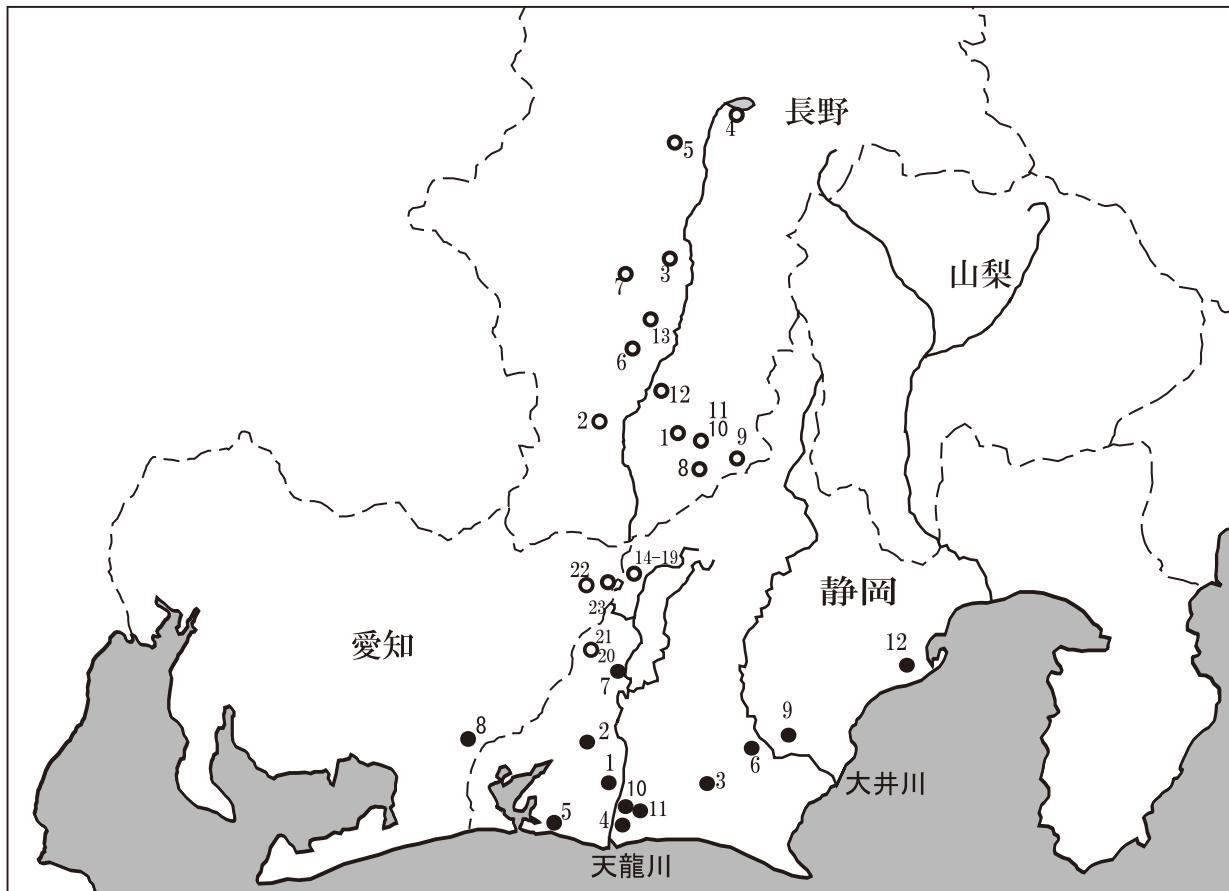
すでに指摘したように、三河から南信濃に運ばれた梵音具が少ない。七藏寺鰐口を除けば、元の奉納先は旧足助町（現 豊田市）と設楽町長江と伊那街道（三州街道）沿いの堂・庵である。この道は駒場を経由し飯田へつながる谷筋の異なるルートである。三河からの梵音具が飯田以北に認められ、以南や遠山谷に認められないことは、ルートの違いによる往来の多少に起因するだろう。

（2）国境の鰐口

信濃と遠江の国境にある浜松市天竜区水窪町内に伝わる鰐口は、表1で掲げたようにすべてが別の奉納先から二次、三次の移動によって奉納されている。

山王社鰐口と金吾八幡社鰐口は、水窪から30km程南部にある天竜川の支流阿多古川沿岸の藤平、懐山（いずれも旧天竜市）の寺社に奉納されていた例である（足立順司2009b）。門柄愛宕社の鰐口に刻まれた元の奉納先の遠江末世村は、旧豊岡村（現 磐田市）万瀬と考えられ、いすれも遠江国内からの移動である。

八剣池神社鰐口は愛知県東栄町下田諏訪神社から移動した例である。下田は水窪から15km程南部で、移動先では最も近い。上村区鰐口にある奉納先の下山平は、旧愛知県下山村・額田町（現豊田市・岡崎市）である。戸中薬師堂旧蔵鰐口の奉納先今津諏訪神社は遠江には



○1~23は表1 梵音具一覧の社寺・堂と共通番号である。

- 1 新善光寺 ● 2 安樂寺大日堂 ● 3 懸川村乘安寺 ● 4 高木郷九所社 ● 5 鴨江寺 ● 6 岩崎毘沙門堂 ● 7 大嶺西光寺
- 8 赤岩山法言寺 ● 9 伊大郷十二權現 ● 10 赤池郷 ● 11 本郷正福寺 ● 12 安西大林寺

図19 梵音具分布図

表1 梵音具一覧

番号	名称	旧・現蔵地	移動した国	移動元	年号	西暦
1	法全寺梵鐘	飯田市千代	遠江から信濃	遠州豊田郡新善光寺	永享十一年	1439
2	立石寺梵鐘	飯田市立石	三河→遠江→信濃	設樂郡岩倉社、伊那佐郡安樂寺	文明元年	1469
3	常圓寺雲版	伊那市山本町	遠江から信濃	遠州懸河村乘安寺	天文元年	1532
4	觀音院鰐口	岡谷市小坂	遠江から信濃	遠州鴨江寺・河勾庄高木郷九所社	永祿九年	1566
5	七藏寺鰐口	辰野町上辰野	三河から信濃	八名郡法言寺	永正七年	1510
6	瑠璃寺鰐口	高森町市田	遠江から信濃	井伊多沢大日堂	康正元年	1455
7	白山社鰐口	伊那市西春近	遠江から信濃	質呂庄岩崎毘沙門堂	永正十四年	1517
8	稻荷社鰐口	飯田市上村中立	遠江から信濃	遠州豊田郡池田庄本郷正福寺	宝徳元年	1448
9	拾五社鰐口	飯田市上村下栗	遠江から信濃	大峯(嶺)上鈎釣西光寺	長祿四年	1460
10	中郷正八幡宮	飯田市中郷	駿河から信濃	伊大郷十二權現	永享八年	1436
11	中郷正八幡宮	飯田市中郷	遠江から信濃	赤池郷某觀音	天文十三年	1544
12	安養寺梵鐘	喬木村阿島	三河から信濃	設樂郡長江谷觀音堂	永享七年	1435
13	瑞應寺雲版	松川町上片桐城	三河から信濃	足助宮平光勝庵	応永三十年	1423
14	八剣池社鰐口	天竜区水窪町地頭方	三河から遠江	本郷下田諏訪大明神	文明三年	1471
15	山王社鰐口	天竜区水窪町奥領家	三河→遠江→遠江	設樂郡牛頭天王、懐山六所	応永十四年	1407
16	金吾八幡社鰐口	天竜区水窪町奥領家	遠江から遠江	遠州阿多古藤平阿弥陀堂	永祿十年	1567
17	愛宕社鰐口	天竜区水窪町門桁	遠江から遠江	遠江國末世村	応永二十年	1413
18	戸中薬師堂鰐口	天竜区水窪町戸中	不明から遠江	今津諏訪神社	宝徳二年	1450
19	上村区鰐口	天竜区水窪町上村	三河から遠江	下山平伊良湖大明神	永享十三年	1441
20	相河熊野社鰐口	天竜区佐久間町相川	移動なし		文亀元年	1501
21	相河薬師堂鰐口	天竜区佐久間町相川	移動なし		永正十七年	1520
22	阿弥陀堂鰐口	豊根村三沢	遠江から三河	遠江山名郡貫名郷大頭龍社	永正十四年	1516
23	熊野社鰐口	豊根村大谷	遠江から三河	遠州一宮庄粟倉熊野社	応永四年	1397

認められず、他国から運ばれた例であろう。

鰐口はこのように様々なところから運ばれたことがわかり、「市肆を連ぬ、信濃国の通路の宿所」『遠江国風土記伝』という水窪の交易範囲を示している。

三河と遠江の国境にある浜松市天竜区佐久間町相川に伝わる鰐口は、いずれも相川熊野と薬師に奉納された鰐口である。以前どこかに懸けられていた鰐口ではないが、銘文の刻み方は金釘流で、写真のみの判断であるが専門の鋳物師によるものとは思われない。これをみると、合祀された2柱の神仏にそれぞれ奉納したものであろうか。

愛知県豊根村は対岸に北遠、峠越しに南信濃という国境の村である。阿弥陀堂鰐口は、遠江山名郡貫名郷の鰐口とは別に、形態と撞座文様から16世紀前葉と考えられる無銘鰐口があり、それぞれ堂の左右に一口ずつ懸けられている。

豊根村大谷の熊野神社には、無銘も含め8口以上の鰐口がある。応永の銘の鰐口には遠江栗倉（森町）熊野三所権現銘、旧旭町（豊田市）小畠薬師堂銘など他地域から運ばれた鰐口がある。水窪の鰐口のように、国境の村の交易範囲を示している。なお遠江からの往来は水窪、大津峠を越え、門谷を通過するルートが考えられる。

熊野神社鰐口の中に慶長十七年銘の河内村に奉納された鰐口があるが、隣の市原觀音堂には永正八年田辺氏寄進の鰐口がある。佐久間相川の鰐口も永正十七年銘であり、同じ頃である。この段階で鋳物師に注文して鋳造させた鰐口が登場する。

この大谷とは、もとは日本一小さな村といわれた富山村大谷で、合併し豊根村に含まれた。この豊根と富山村は「入会出郷」という同族関係による開発によってできた村落があり、本郷と出郷（枝郷）による村落形態をとっていた（竹内利美1944）。その開発者は熊野からの落武者田辺氏や『熊谷家伝記』の熊谷氏という落武者であった（安藤・矢守1972）。熊谷氏は当初、水窪奥山に、そして水窪門谷そして対岸の天龍村坂部を本拠地とした。したがって地縁というよりも同族集団によって祭祀が行われていた。熊野神社は当初、田辺氏の氏神であったが、先住多田氏と熊谷氏が受け入れ村の守護神としたという。さらに佐久間ダム建設に伴って水没する本郷の河内や佐多（もとは坂部の枝郷）や枝郷の神々を合祀した。このため多くの鰐口が伝來したというが、複数の鰐口を使用する祭祀が行われたことも想定できる。

以上の点を述べ、筆を置きたい。

謝辞

文末ではあるが、執筆にあたって下記の方々に援助や教示をいただいた。記して感謝の念にかえる（敬称は略す）。

辰野町立美術館 岡谷市觀音院 飯田市法全寺 立石寺 拾五社神社 中郷正八幡宮 伊那市常圓寺 高森町瑠璃寺 豊根村阿弥陀堂 熊野神社 静岡市大林寺 愛甲昇寛 坪井俊三

引用・参考文献

愛甲昇寛 2007 『慶長以前鰐口・雲版年表稿』
足立順司 2009a 「出土鰐口について」『法明寺古墳』
足立順司 2009b 「天竜の鰐口」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要 第15号』
足立順司 2010 「鋳物師の本貫」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要 第16号』
安藤慶一郎・矢守一彦 1972 『国境いの村』
飯田市美術博物館 2009 『遠山谷北部の民俗』
市村咸人 1932 「鰐口から見た遠山文化」『信濃第4号・第10号』
伊那市史刊行会 1984 『伊那市史 歴史編』
小和田哲男他 1989 「第五章 戦国期の浜北と徳川家康」『浜北市史通史 上巻』
小杉達他 1989 「第三編 交通」『天竜川流域の暮らしと文化 上巻』
佐藤郁太 2004 「静岡県の雲版」『歴史考古学 第54号』
静岡県 1994 「史料番号1192」『静岡県史 資料編7』
静岡県 1996 「補遺144」『静岡県史 資料編8』
竹内利美 1944 『中世末における村落の形成とその展開』
龍山村 1980 『龍山村史』
坪井良平 1970 『日本の梵鐘』
坪井良平 1958 「伊那に残る三河の古鐘」『伊那366号』
東京国立博物館 1990 『東京国立博物館図版目録 仏具編』
豊橋市美術博物館 2002 『普門寺 赤岩寺展』
長野県歴史館 2000 『歴史の宝庫秋葉みち』
浜松市役所 1971 「青山御領分絵図」『浜松市史二』
古典籍刊本
『遠江国風土記伝』は昭和10年刊谷嶋屋刊本による。
『掛川誌稿』は昭和47年刊名著出版本による。